
時をかける翼

ゆうー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時をかける翼

【Nコード】
N6901D

【作者名】
ゆうー

【あらすじ】
AD1000年のガルディア王国。そこに一人のクロノとゆう少年がいた。クロノは、お祭りで、謎の少女マールと出会ったのだった。

ブログぐ始まりを教える朝ぐ

時は

流れる

刻々と

僕らをのせて・・・

カコン カコン

リーネの鐘が誰かを呼んでいる
時がきたこと知らせるように

クロ・．．．．ク・ロ・ノ・．．

クロノ。

『クロノったら!!』

『いつまで寝てるの?! 起きなさい!!』

まぶしい朝の光が、部屋をつつみこんだ

『うふあゝ、母さん。

おはよ』

母に起こされやっとなきた寝癖で髪がツンツンの赤毛の少年は、クロノ。ながい夢からめざめたように起きた

『あなた、昨日は興奮して眠れなかったんでしょう?』

『ああ、だって今日は、1000年に一度のお祭り、千年祭だよ?』

クロノは眠気まなこをこすって母さんに答えた。

『いいから、早く準備しなさい。今日は、幼なじみのあの発明家のあのコ……なんだっけ、とりあえず。そのコ発表があるんですよ？』

『う〜』

《幼なじみ、発明家》

クロノはまだ、起きたばかりで頭が働かなかったでも、
すぐにはっとした

『どうしてもっと早く起こしてくれなかったんだ〜』

『何、言ってるの〜何度も起こしたわよ』

クロノは、寝癖のまま部屋を飛びだした。その後をクロノが飼っているネコが追う

『クロノ！』

『何？』

『これもつていきなさい。』

クロノの母は、クロノに少しばかり多目に金を渡した。
クロノはビックリした。クロノ父はずいぶん昔に亡くなったから、
うちはあまり、そんなに金がある方じゃなかったから。

『こんなに沢山？いいの？』

『だって今日は、千年祭よ？いつも、クロノには手伝いしてもらって
るから』

『そうか。ありがとう』

『大事に使ってね』

クロノの母は、にこっと笑った

『あ、そのかわり、あなたが拾ってきたネコのキャットフード買っ

てきてね』

『ああゝ分かったよ。じゃ行ってくるね』

クロノはそう言って家を飛び出して千年祭が開催されている広場へ向かった。

そしてその時は、思いもしなかった。

今日のこの時から、始まる時の冒険を……

バンバン……バン

祭の始まりを知らせる、花火がなった

『はぁ……はぁ……はぁ……間に合った……』

広場には中央には噴水があつて、いつもとちがい、飾りなどがあつてその周りをかこむように、アクセサリーショップや鍛冶屋いろんな店が並んでいた。そして、子供達はうれしそうにかけまわっていた

クロノは、噴水の奥にある階段を昇つて、この国のシンボルであるリーネの鐘を駆け抜けようとした。

その時

“ドス”

横から何かがぶつかった

『キヤ！！！！』

カコン カコン

リーネの鐘が鳴る

何かをしらせるように

クロノはぶつかった衝撃で倒れた

『つつつ痛〜』

起き上がるとそこには、金色の髪をしたポニーテールのかわいらしいクロノとおんなじぐらいの歳の女のコが倒れていた。

クロノはつかさず、そのコにかけよった

『だ、大丈夫?!』

女のコは起き上がった……

『う、大丈夫』

クロノは、そのコを見て……

どこか……懐かしいようなそんな、感覚におちいった

女のコは、何かを確認するように自分の首を触った。

『あれ？ペンダントがない……』

『ペンダント？』

クロノはその辺を見渡した。すると、何か光る物を見つけたクロノはそれを拾った。
なんか、古そうな水色のペンダントだった

『もしかして、これの事？』

『あ、ありがとう。これ、すっつつつごい大切なものなんだ。』

女のコは、嬉しそうに言った

『そういえば、君の名前は？』

『お、俺？？俺はクロノだよ。君は？』

『え？私、私はえつと……マール、マールだよ』

名前を聞いたが、やっぱりクロノの知らないコだと思った

『ねえ。クロノ！もしかして、一人？』

『うん。そ、だよ』

『ね。一緒にお祭りまわってくれない？』

『え?!』

クロノはビククリした。女のコと一緒に歩くなんて、幼なじみのアイツぐらいだったから

『だって、一人じゃ寂しいんだもん。ね？お願い』

『う、うん。』

クロノはすこし考えた。

『うん。いいよ！俺も一人だし、でも俺の幼なじみがこの広場の

奥で発明の発表するんだ。それに付き合ってくれろ?。」

『うん。いいよ!』

『そう。じゃ〜よろしく!』

『わ〜い。やった〜』

マールはすごく嬉しそうに喜んだ

クロノ達は、広場の奥へ向かった

が、広場の奥の入口にはがっちりした男の人が立っていた

『あの〜すみません〜発明の発表はあ〜?』

『ああ〜今ちょっと準備に遅れてるから、祭でも回ってきてくれな
い?。』

どうやら、時間を潰した方がよさそうだった。

『残念〜じゃ〜クロノまた、来ようか』

『うん。そつだね』

『ねえ、クロノ！私、見たいお店があるんだけど』

『うん。いいよ。行こうか』

クロノ達はまた、歩いてマールの行きたい場所へ向かった

『クロノ、こつちこつち』

その店は鍛冶屋のようで、剣などがおいてあった。
店の主人はすこしかわった服をきた白い髭で年をとった老人だった。

『いらつしやい』

『わ、キレイな指輪』

どうやら、武器以外にも宝石をおいてある様だった。

クロノは、店に置いてある刀に目についた

『おじょうさん。そのペンダントわしにちょい見せてもらわんかの？』

『え？これ？どうぞ』

鍛冶屋の主人にマールはペンダントを渡した。

『ふゝむ。……………』

鍛冶屋の主人はしばらくマールのペンダントをしわだらけの大きな手で、ペンダントをつつみこむようにもち、目で確かめるように、見つめた

『おじょうさん。このペンダントは、ドコで手に入れたのですかな？』

『そのペンダントは、亡くなったお母様にもらったの』

その時思ったクロノは思った、マールもクロノと同じで親を亡くしていたんだと

『そうか、あのくもしよかったら、そのペンダントをわしにゆずってもらえないかな?』

『え?!これを?』

『おじいさん、これは……このコのとて大切な物なんだから、あげられないよ……』

『クロノ……ごめんなさい。おじいさん』

『いやいや、すまんね。そのペンダント昔どこかで見た記憶があつてね。』

『そうなの?』

『あゝだが、わしのどくやらみまちがいだつたよっじゃ』

鍛冶屋は続けた

『そうじゃ、そこの若者にこの刀をやるう』

『え?! いいんですか?』

『ああゝ。失礼なことをしてしまったからな』

『ありがとうございます!!』

『やったね! クロノ』

『マール、そろそろ時間だ行こう!』

『うん!』

とクロノ達はその場を離れようとした時だった

『ちよいと待っておくれ』

鍛冶屋のおじいさんがまた、話かけてきた

『わしの名前は、ボツシユじや鍛冶屋をやっておるが剣を鍛える事もやっておる、その剣がくたびれた時はいつでもきなさい。わしは、ここの地とちよつと離れた島にいるからな』

『わかりましたゝ!!』

そして、クロノ達は、鍛冶屋をあとにした。クロノ達が広場の奥につくと、すでにたくさんの人達が集まっていた。

『うわあ、沢山の人だね』

マールは、目を輝やせていた。クロノ達の目の前には、人が一人立てそうな、屋根つきのステージらしくものが二つあった。

『ねえねえ、クロノ、あれはなんだろうね？』

『さあ、なんだろう？あそこで、誰かが歌うとか・・・』

クロノ達が色々と推測をしてる間に、一人の少し太った中年の男が現れた。

『さあさあさあ、おまたせいたしました！！これから私の娘・・・ルツカの発明を発表したいと思います！』

男がそうゆくと、奥の方からメガネをかけたおかつぱのいかにも、
賢そうな女の子がスタスタと歩きながら出てきた。

『みなさん。こんにちは。今回は、私の発明をみに来ていただきど
うもありがとうございます。』

そう、挨拶すると、ルツカはクロノ達にきずいた。

『クロノ！』

『よ！ルツカ』

すると、ルツカは、クロノのとなりにいる、マールを見た

『まあ！クロノったら。いつのまに女の子をくどいたのよ？』

『ああ、このコはさっき、そこで会ったんだ、マールっていうんだ。
』

『よろしくネ。ルツカ』

『さあさあ、ルツカ、話はあとあと！』

『ああ、そうね、父さん』

そう行って、ルツカは元の位置に戻った

『今回、私が発明したのは、ワープをできるマシンです。』

『ワープだって！クロノ！』

『ワープといっても、そんなタイムマシンみたいにどこかに飛ばされるわけではありません。まず、この右側のステージに立ちます。どなたか、試してみたい方いますか？』

『俺！やりたい！』

クロノはまっさきに手をあげた

『じゃ、クロノ、このステージに立って』

『おし！』

クロノはガッツポーズをした

『ええゝずるゝクロノ！私もやりたいゝ』

マールは悔しいそうに言った

『じゃ！始めるわよ！父さん！そっちよろしく！』

『あいさ！』

ルツカは右のマシン、ルツカの父は左のマシンについた

『スイッチオン！！』

そういつて、スイッチをおした後、ルツカとルツカの父は、マシンについているレバーを全力で回した

ぐっおんぐっおんぐっおんぐおんぐおんぐおん……

二つのマシンの間には、電流が流れまじめた
すると、クロノの体が光はじめた

『わ！なんだこれ？体から……』

何かを言いかけたたん、クロノ体は、光に埋もれ消えたたん
ルツカの父側のマシンが光出した。
すると、そっちのマシンにツンツンの赤毛が見えたと思えばクロノ
が出てきた

『うっわ、すっごい！』

クロノが登場したたん、その場にいた人、全ての人が『お』と
言って拍手をした
すると、マールがルツカの方に行った

『ねえ、ねえ、ルツカ！！次、私にやらせて、お願い！』

『え？！』

『いいじゃないか、ルツカ。マシンの調子もいいそうだし』

『でも、私の計画では一回だけだったんだけどな……』

『ねえ！クロノ！イイでしょ？』

『え？分かんないけど……いいんじゃない？』

『やった　じゃ～きまりきまり！』

『まあ～大丈夫でしょう』

ルツカはマールの嬉しそうな顔を見て、ほがらかに言った

『さてさて！では、次は、このコをやってみましょう！』

ルツカの父がスマイル満開でお客さんに言った
クロノは、元いた場所に帰った

『それでは、はじめます！』

ペンダントの光は、マールの体をつつみこんだ。
その瞬間、マシンとマシンの間の電流がまじわり、ゲートのような
ものが現れ、光となったマールはまた、マールに戻りマールをのみ
こんだ

クロノは、急いで、マールを追いかけてようとしたが、ギリギリで間
に合わず、ゲートはマールとともに消えた。

辺りは、シーンとした……

『さあ！さあ！女の子は、みごと姿を消しました！これにて閉会
します！』

ルツカの父は、慌てて言った
その場にいたお客さんは、何が何だかわからず、その場をさっとい
った。

『ル、ルツカ、いったいどうゆう事だ！！あの子は消えちゃったよ
！』

ルツカの父は、ルツカにしがみつくように言った。

それに変わって、ルツカは冷静に何か、ブツブツいいながら、考え

ていた

『マシンの力では……あんな空間は開かない……。別の何かの力が働いて……。でも、それは……。』

クロノは、辺りを見渡した。すると、マールがいた所にマールのペンダントが落ちてあった。

クロノは、ペンダントを握り締めて、そして、首にかけた。

『ルツカ……。もう一度、マシンを動かしてくれ』

クロノは、いつもと違って真剣な顔つきでいった。

ルツカは、クロノが首にかけているペンダントを見てはっとした

『なるほどね……。クロノ、あんた行くのね。男はそうでなくちゃ。父さん。急いで準備して!! もういち度やるわよ!!』

『なんだかわけわからんけど……。あいさ!!』

『父さん!! 私の計画では、発表は、1回のはずだった。だから、マシンもそううまく動くとはかぎらない!! いつもの、100倍で回して!!』

『あいあいさ!! まっかしておけ!!』

『スイッチオン!!』

ルツカとルツカの父はいつもより力いっぱいレバーをまわした。

ぐううう おんぐううう おんぐおん

『もつともつと！』

『あいさー！』

ぐつつつ おんぐつつつ おん

『もつともつと！』

『あいさー！あいさー！』

ぐおんぐおんぐおんぐおんぐおん

『そうそう、いいかんじ！』

するとマシンの間から電流がビリビリと流れだし、強烈にからみあった

ペンダントは光だし、マールのように、クロノを包み込んだ

『クロノー！私も、原因をつきとめて後を追うわー！』

ルツカの声がかすかに聞こえた・・・

クロノは、意識をうしなった

そして、ゲートの中に消えていった。

ブローグ〜始まりを教える朝〜（後書き）

この物語は、クロノトリガーとゆうゲームから元につくりました。
ストーリーがとってもよくできていたので、書いてみることにしました。

がんばって、最後まで書いてみたいと思います!!

NO1 消えた王女く400年の時を越えてく 前編

意識が戻ったクロノは

不思議な空間の波に流されいた

すると 目の前が暗くなり空間の出口に出た

そして 暗い闇がぬけ 目の前が明るくなり 周りの景色が見えてきた

クロノは気がつくとも見たこともない場所に立っていた

『ここは・・・どこだ？』

クロノはマールを探すため、ここはひとまず動こうと思いおもむろに歩きだした。

すると、谷がありその下には川が流れていた。そして、向こう岸に渡れるように、橋がかけてあった。

クロノは、どこかの山にでもたどり着いたのかと思い、とりあえずその橋を渡った橋を渡ると、そこには、頭がツルツルで触角があつて目がギロリとした人間と同じく2速歩行の奇妙な2匹動物が、緑の丸いぶつたいを蹴っていた。

『なんだ、こいつら・・・』

クロノは、そーと通りすぎようとしたら、1匹の世にも奇妙な動物がギロリとクロノ方を見て緑の丸いぶつたいを蹴って、クロノの顔面めがけてぶつけてきた。

クロノは、とつさに顔をガードした。

『ひひひ、人間がこの山にくるのはめずらしいな』

奇妙な動物がしゃべった

『しゃ、しゃべった!!』

クロノはびっくりした。

すると、クロノにぶつかつた緑の丸いぶたいは、耳がでてきて、2本の足がでてきて、緑のこれまた、奇妙な動物になった。

『久しぶりの獲物だよっちまえ』

すると、奇妙な動物はクロノめがけて襲つてきた。クロノは、無我夢中で、腰にまみつけた。鍛冶屋のボツシュからもらつた刀をふつた。

シャキーン

グサ

『ぐえ~~~~~』

奇妙な動物は倒れてそして、消えていった。

『うわあ~~~~こいつ、人間なくせして、強ええに逃げる』

そういつて、奇妙な動物は森の中に消えていった。

『いたついなんなんだ……あいつらは……でも、よかった、もしもの時のために、剣術をみにつけておいて……』

クロノは、しばらく動揺しうていたが、こんなやつ等いたらマールが危ないと思い、いそいで、山を下りた。
山をおりると、そこには、自分が住んでいたガルディアとさほど変わらない町並みが並んでいた。

『ここは……ガルディアなのか……？』

だが、どこことなく、クロノが住んでいたガルディアとは違っていて、どこか、悲しげな感じにおぼえた。

『おや、見かけない顔だね』

クロノはまた、あの奇妙な動物かと思い、びっくりして、刀に手をやった。

『おおい、まで……俺は人間だ……！』

『な、なんだ、人間か……』

クロノはほつとした。クロノ後ろから声をかけた男は、頭にターバンをまいていて髪が黒く長く後ろでたばねていた。

『俺は、冒険家のトマっていうんだ。ここ最近、こんな世の中でここどとどまっているんだ。君も冒険家かい？』

『俺は、クロノ、たしか、今日は千年祭のはずだけど……どうして、こんなにひっそりとしているんだ？』

『せんねんさいだって？とぼけるなよ。今はAD・600年だ』

『なんだって?』

クロノは啞然とした。まさか、400年前にタイムスリップして
いるとは思わなかったからだ。

『それに、今は祭りなんでやってる場合じゃない。祭りなんかやっ
てたら、この国は魔王にのっとられちゃうぜ』

トマは、煙草にマッチで火をつけた。

『ま、まおう?????』

『お前、魔王のことも知らないのか?今は、人間と魔族の戦争中だ
ぜ?』

トマは、煙草をくわえながら言った。

クロノは思い出した。昔、ガルディアの地は魔王がいて、魔王と人
間が戦った話のことを、でもそれは単なる迷信だと思っ
た。

『ま、まさか・・・』

クロノは、こんな時代にマールが一人さまよっていると
思うと、頭の中が真っ白になった。
そして、はっとした。

『トマ、マールっ子を見てないか?金髪のポニーテールの女の子な
んだけど』

『金髪ね〜もしかして、リーネ様の事か？さっき、城のやつらと山から出てきたけどな』

クロノは、マールの事だと思いいそいで、走った。

『お〜い！！何かあったら、町の宿に来いよ〜俺はそこにいるから〜』

『わかった！！ありがとう〜トマ』

クロノは礼を言った。

クロノは、城がある森へと向かった。ここが、400年前のガルディアなら、クロノ達が住んでるガルディアと同じ場所に城はあるはずなのだから

城についた。城は、クロノ達が住んでいるAD1000年のガルディア城と同じく白く三つの塔がならんでいた。クロノはおそろおそろ城の扉をあけた。

ガシャン

『なんだ？お前！！さては、魔王の手先か？』

城に入ったとたん、クロノは、城の兵士に捕まった。

『や、やめろ！！俺は、そんなんじゃ・・・』

『おやめなさい。』

どこかで、聞いた声だ。

『リーネ様！！』

クロノは声の方を見た。

その声の主は、マールだったのだ。マールは、白いドレスをきていた。そして、頭の冠には、主族であるあかしのガルディア王国の印があった。

そして、クロノは、思い出した。マールは、マールではなくマールディア王女。

ガルディア王国の王女だと。

『はなしなさい。この方は、わたしを助けてくださった恩人です。』

『は、そうとは知らず、すみませんでした。』

『クロノ、私についてきて。』

クロノは、黙ってマールの後ついていった。そして、螺旋状になっている石でできている階段を上って一つの部屋へマールは、クロノを案内した。

クロノは、何がなんだかもうわけわからずじまいだった。まさか、自分の目の前にいるのは、あのマールディア王女だとは思ってもいなかったから。

『えへへ。ビックリしたよね』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

クロノは黙っていた。

『ごめんね。騙して、でも見てみたかったの。このお城の外の世界を』

『マール・・・・・・・・』

『でも、嬉しかった。クロノと一緒にいられて・・・・クロノ、私ね・・・・・・・・』

マールが何かを言いかけたとたん、突然また、ペンダントが光出した。

『え????何これ!!!!か、体が・・・・』

『マール?????』

『バラバラに・・・・』

突然、マールの姿が半透明になった。

『ど、どうしよう』

ペンダントは、いつもより激しく光だしてそして……

『クロノ……いやあああああああ~~~~~』

『マール!!!!!!!!!!!!!!』

クロノは、マールの手をつかもうとしたが……

マールは、消えてしまった。

そして、クロノは、時間が止まったように。固まっていた。
クロノは、今、自分がいるところが、AD1000年ではなく、AD600年にきてしまっていること……
そして、目の前で、また、マールが消えてしまった事。
クロノの中ですべての事が、何がなんだかわからなくなってしまった。

そして、クロノは、その場に倒れこむように座った。

『これから、どうしよっていうんだ……』

すると、遠くの方から、何やら声が聞こえた。

『ちょっちょっとはなして……！私は、クロノに用があるんだから……！』

どこかで、聞いたことある声だ……

ドゴン

勢い良く、ドアがあいた

クロノは、振り返る

そこに立っていたのは……ルツカ……！

『ルツカ……』

『クロノ……！こんな所にいたのね……！冒険家のトマって人から、あなたの居場所を聞いたわ……！……あら、あの子は……？』

『……』

クロノは、うつむいた。そして、今までの事を話した。

『なるほどね．．．どこかで見た事あるって思ってたけど．．．
・彼女がマールディア王女だったのね．．．でもなぜゲート
が出ていないのに彼女は姿を消したんだろう．．．』

ルツカは、またブツブツと言いながら、考えだした。

『AD1000年の王女．．．AD600年の王女．．．
』

クロノは、まだ、混乱していて、呆然としていた

『なるほどね．．．』

ルツカは、何か分かったように言った。

『クロノ！私の話を聞いて！！今は、AD600年。でも、ここに
いたのは、AD1000年の王女マールディア。では、どうして、
この時代の王女は今、私達の目の前にはいない．．．そして、マ
ールディア王女は消えてしまった。その、存在が、なくなったかの
ように、』

『どうゆつことだ？？？』

『つまり、こうゆつ事よ！！ここにいないければならない、王女AD
600年の王女は、AD1000年のマールディア王女のご先祖様。

だけど、今ここにいなければならぬ王女はここにいない。AD600年の王女になにか、命の危機が迫っているんだわ！だから、マールディア王女の存在が消えてしまった。何ものかが、AD600年の王女を暗殺しようともくろんでいる。だけど、私達がその暗殺計画を阻止できれば・・・」

クロノは立ちあがった。

「マールを・・・助け出すことができる。」

「そうゆうことよ。」

ルツカの眼鏡が光った。

「クロノ急ぐわよ！！早くしないと、AD600年の王女の命があぶない！！」

「おう！！！！」

クロノ達は、走った。

マールを助けるために・・・

NO2 消えた王女 400年の時を越えて 中編

『クロノ！！まずは、情報収集よ！お城の人に聞いてみましょう』

ルツカは、螺旋状の階段を駆け足で下り、息を切らしながらいった。

『王様とか・・・何か分からないかな？』

『そうね！！聞いてみましょう！』

クロノ達は、階段を下り、中央の大きな扉へ走った。

ドカン

いきおいよく開けたので、ものすごい音がした。

『な、なに事ですか？』

王の間は、赤いじゅうたんが、中央の扉からまっすぐに引かれていて、その先には、二つの王様が座りそうな椅子があった。

そして、もう、ひとつの椅子に王冠をのつけた王が座っていた。

クロノ達は、王のもとへ走った。

『おー！そなたたちは、リーネを助けていただいたお方と兵士たち

か聞きましたぞい。』

『そ、それが・・・』

クロノが事情を説明しようとしたら、ルツカが後ろから蹴った

ポカ

いった！！なにするんだよう？

クロノは、小声でいった

あんた、バカね、本当のこと話したら、大騒ぎよ！！ここは、私にまかせて！！

『王様、リーネ様は、誘拐をされていたんです！！私達は、リーネ様を助けました。ですが、リーネ様を誘拐した犯人は、まだつかまっています』

『なんじゃと！！！』

『ですが、お待ちください。私達が、必ずや、誘拐犯を懲らしめてやりますわ！！』

『おお、なんと！！そなたたいが！！』

『ええ！そこで、お聞きしたい事があるのです！！』

『なんなりと』

『王様、最近、何か気になる事とか、ないですか？どんな小さな事でいいわ！！』

『そうじゃな〜』

王は、少し間をあげ考えた。

『最近、なにやら、大臣が西の古い教会にこそそと、通っているんじゃない。』

『王様に仕える大臣が・・・？』

ルツカは、ボソつと言った。

『王様！！大臣は今どこに？？』

『大臣は、右の奥の階段を上った塔のうえじゃ』

『わかりました。ありがとうございます！』

ルツカは、お辞儀をフカブカとした。

『急ぐわよ！！クロノ！！』

クロノ達は、また、螺旋状の階段を昇った。

昇り終えようとした時なにやら、老人の声が聞こえた

シっっ！！誰がいるわ・・・

『なぜだ．．．リーネは．．．今、あの教会に閉じ込めたはず．．．』
。』

なんですって!!

『まさか．．．．』

うわ!!こっちへくる!!隠れて!!

クロノ達は、そばにあったカブトの後ろに隠れた。
クロノは、ちらつとのぞいた、その人物は

大臣だった。

まじかよ．．．

大臣が去った後、クロノ達は、カブトの後ろから出てきた。

『なぜ、大臣が、自分が仕える王女を誘拐しなきゃならないんだ．．．』
．?』

『そうね．．．不自然だわ．．．とりあえず、行ってみましょう!
!西の教会へ!!』

西の教会へついたクロノ達は、さっそく中に入った。すると中は、ごく普通の教会だった。教会の中は数人のシスターがいた

『んゝ何も、変な感じはしないわねゝ』
ルツカは、あたりを調べた

クロノは、シスターに声をかけた

『あゝ』

『私達は、世界の平和をお祈りしてますの………イヒヒヒ』

シスターは、何か様子が、可笑しい。クロノはそう思った。

そして、クロノはふと光る物に目がいった

『なんだ？これ？』

『何？どうしたの？』

『カミカザリだ』

『ちょっと、見せて』

ルツカは、クロノが持っているカミカザリを取った

『………これ、ガルディア王国の紋章だわ！！』

『なんだって？』

『どうやら、バレちゃったみたいね。』

『え？！』

すると、クロノ達のまわりには………4人のシスターがと
つたら、シスターの姿がヘビのようなモンスターに変わった

『かゝ囲まれた』

『ちょうど、いいわ！私が開発した武器の使いどきよ！！』

ルツカはポッケからピストルを出した

『やるわよ！！クロノ！』

『おう！！』

へびの1匹がルツカにおそってきた。

その瞬間、ルツカは、ピストルを打った
すると、ルツカの後ろからもう、一匹のへびが……

が、クロノによってその、へびは倒された。

『めんどくさいから、いつきにやるか！』

『え？どうするの？』

クロノは刀を左手で持ったそして、おもむろにふりまわした。

『ギャ』

『ぐえええええ！』

モンスターは、一撃で倒れた

『だ、誰だ！！！！』

クロノは何ものかにさげんだ

NO3 消えた王女 後編 西の教会の謎

クロノ達の目の前に現れた

その何ものかは

緑のマントをはためかせていた

その何者かは、顔はカエルだが人間のように手足がありちゃんと服もきているカエル男だった。

『か、かえる??』

カエル男は、後ろにいるクロノ達の方に体を向かせた。

『ゲロゲロ』

カエル男は、ホッペタの袋をプクプクとカエルの様に膨らませた
ルツカは、意識をとりもどした。

『キャッ!! な、何?! カエル?』

カエル男は、クロノ達の方をチラッとみた。

『お前達も、リーネ様を助けにきたのか？』

『あ、あゝそうだよ』

クロノは、あたふたして答えた。

『よかつたら、一緒に戦ってくれないか？』

《クロノ、こうなつたらカエル男でもなんでもいいわ！一緒に戦ってもらいましょ》

ルツカは、クロノに耳うちした

『俺達も、リーネ様を助けなきゃならないんだ。だから・・・君と一緒に来てくれると心強いよ！』

『そうか！よろしくな！俺は、グレ・・・・いや、カエルだ！カエルでいいぜ！！』

《こんな、なりじゃ分かってもらえないしな・・・》

カエルは、手を高くグーの形をさせ、笑顔で自己紹介をした後、クロノ達に聞こえないような声でボソツと何かを言った。

クロノは“？”が頭の上に出るるように頭を右に傾けた

『カエルか、俺は、クロノ！』

『わ、私は、ルツカよ。カエルさんよろしくね』

ルツカは、ちよつと不安そうに言った

『この、教会には、隠し扉があるはずだ！！！それを、探すんだ！』
カエルが言った。

『分かったわ！！手分けして探しましょう！』

そういつて3人は、教会の中を隅々まで探した。
ルツカは、椅子の下を
カエルは、壁をことまかく探した。

クロノは、二人と違って、何かを探す様に辺りをキョロキョロと見ていた。

『うーん。何も可笑しい所はないわ』

ルツカは、疲れたように言った

『こつちも、別に変わった所はないぜ』

カエルは、ホッペタをプクプクさせて言った
ルツカは、クロノをチラッとみた

『クロノ！！何やってんのよ！！あんたも、真面目に探しなさいよ！！！！』

ルツカは、ただつつたてているだけのクロノに怒ったすると、クロノはおもむろに教会の隅にある、パイプオルガンへ目をやった。

『もしかしたら……』

ポツリとクロノは言った

『え？何？』

ルツカは、クロノの言葉が聞き取れなかった
クロノは、パイプオルガンを弾いた

『何、やってんのよ!!』

ルツカは呆れた様にいったすると、

“ドゴン”

とゆう音になり、ただの壁だった所が扉になった

『やったぜ!!クロノ!』カエルは、クロノの背中を叩いた

『まさか、オルガンがドアを開く鍵になっていたなんて……』

ルツカは、ブツブツ言い始めた

カエルは、ドアの前に立った

『どうやら……この奥は、奴らの巢らしいな』

『よし！行こう！』

クロノがそうゆくと、カエルとルツカは、うなずいたそして、奥のドアへ進んだ

中に入ると、モンスターがうじゃうじゃといったカエルとルツカとクロノは、柱のすみに隠れた

『こんなに、沢山いるよ・・・』

クロノは、不安そうに言った

『ひつとばし、やるか！』

カエルは、剣を握り、飛び出そうとしたその時。

『待って！！』

ルツカがカエルを止めた

『私に考えがあるの！私が発明した催眠音波機を使えばこいつら、ミンナ、オネンねするわ！！』

『さいみんおんぱき？？？』

カエルは、大きな瞳をクリクリさせて不思議そうに言った

『ルツカは、こう見えても発明家なんだ！』

クロノはカエルに説明した

『二人とも耳をふさいでおいて!!』

そう言つてルツカは、水色のピストルを出した
クロノとカエルは耳をふさいだ

ルツカは、そのピストルを高くあげて引き金を引いたすると、ピストルの穴から緑の光線が出て、部屋全体を包んだ

ピョピョピョ

緑の光線は消えた

『も〜いいわよ!!二人とも!』

ルツカがそうゆつと、二人は耳から手を離した

『わ!!』

クロノは辺りを見渡しておどろいた
モンスター達は、ミンナ、ぐっすり眠っていた

『すげ〜ミンナ眠っている!!』

カエルも驚いた

『どう?これが私の発明!おほほほほ』

ルツカは、高笑いをした

『すごいな！！ルツカのはつめいとやらは！』

カエルはルツカを尊敬の眼差しで見つめた

『どうも』

ルツカのメガネが輝いた

『よし！今のうちに奥の部屋へ！』

クロノがそう言っただけ、三人は奥へと急いだ。奥に進むと、部屋があり、またそこにもパイプオルガンがあった。

『きっと、このパイプオルガンも何かを開ける鍵になってるわ』

ルツカは、メガネを上下に動かしながら言った。

『よし！弾いてみよう』

そう言って、クロノは、またパイプオルガンを弾いた。

ドカン

奥から、教会の時と同じ様な音が聞こえた。

『ビンゴ！！きつとこの奥の部屋ね！急ぎましょ！』

『俺達は、犯人の近くまできてるはずだ！ここからはしっかりと気をはっていくぞ』

カエルがそう言うのと、クロノとルツカはうなずいた
クロノ達は奥の部屋へと進んだすると、突き当たりに扉があった

『きつとここだ・・・』

クロノは緊張しながら言った。

『そうだな・・・』

クロノ達は、息をひそめ戦いの準備をした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6901d/>

時をかける翼

2010年10月21日20時23分発行